

〈論文〉

# 子どもの貧困研究における 「子ども」との向き合い方<sup>1</sup>

長澤 敦士

## 0. はじめに

本稿の目的は、「子どもの貧困」研究において研究者や調査者がいかにして「子ども」—それは、時に若者という存在としても現れる存在としての「子ども」—と向き合うことが可能なのかについて思索することである。そこで、本稿ではとりわけ2000年以降の「子どもの貧困」研究をレビューしながら、そこでは「子ども」がどのように扱われてきたかについてまとめる。その上で、昨今、「子どもの貧困」研究で提案されつつある「子どもの貧困の経験」という視点を紹介し、その視点の導入が今後の「子どもの貧困」研究において研究者や調査者の「子ども」との向き合い方にどのような示唆を与えるかを提示する。ちなみに、本稿では、これまでの「子どもの貧困」研究のすべてを網羅することは筆者の力不足の故、到底できないため、日本における教育社会学を中心とする教育学領域や社会福祉学領域における「子どもの貧困」研究において主要だと思われる文献（書籍や論文）に限定して参照することにするを先に断っておく。

---

1 本稿は京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した筆者の修士論文『「子どもの貧困」研究における生活史法の方法論的可能性—生活保護受給世帯で養育されたある若年女性の生活史調査から—』の「第一章 先行研究の検討」を大幅に加筆・修正したものである。

## 1. 「子どもの貧困」研究の2つ主眼：「家族」と「子ども」

日本では2000年代後半から「相対的貧困」<sup>2</sup>という意味における「子ども」に及ぼす影響に焦点を当てた本が刊行されると同時に、新聞をはじめとするメディア等で「子どもの貧困」というタームが取り扱われるようになった。そこでは、子ども期に貧困という社会状況に置かれた人々に生じる不利や困難が社会問題として取り扱われている（阿部2008、山野2008、浅井・松本ほか編2008、生田2009、青砥2009など）。また、このころから社会福祉学や教育学領域を中心に「子どもの貧困」を主題に据えた研究が行われるようになった。それらの研究は、大きく2つの潮流に分類できる。1つが「家族の中の子ども」として、「子ども」をとらえた研究である。具体的には、「貧困の連鎖」や「貧困の世代的再生産」に関する研究である（第2節にて検討）。もう1つが貧困の中を生きる「主体」として、あるいは貧困問題の「当事者」として「子ども」をとらえようとする研究である。具体的には、Ridgeによる「子ども中心アプローチ」による研究で、貧困の中にある「子ども」の声を聴くことで彼らの生活世界や意味世界の解明を試みている研究である（第3節にて検討）。しかし、ここで留意しておかなければならないのは、これら2つの研究群は、深層では深く結びついており、不可分であるということである。その意味において、両者の研究群は、その主眼の重きをどちらにおいているかだけの違いともいえる。そこで、その双方に主眼を置きながら両者を上手に統合し、研究するための視点として大澤（2017）による「子どもの貧困の経験」という視点が提案された。その視点を共有する研究では、〈移行〉というキー概念の導入によって、「子どもの視

---

2 「相対的貧困」とは、「絶対的貧困」に対置される概念で、阿部（2008）は、前者が「人として社会に認められる最低限の生活水準は、その社会における『通常』から、それほど離れていないことが必要であり、それ以下の生活を『貧困』と定義」（阿部2008, p.42）づけるのに対し、後者は、「人々が生活するために必要なものは、食料や医療など、その社会全体の生活レベルに関係なく決められるものであり、それが欠けている状態」（阿部2008, p.42）のことを指すという。ここで用いられる「相対的」という言葉が含み持つ意味について、岩田（2007）や阿部（2008）、松本（2008）も指摘するように「相対的貧困」も「貧困線」という一定の基準を定めるという点において、格差論や不平等論での用いられる意味における「相対的」とは意味が異なる点には留意が必要である。

点」から「貧困の経験」を連続的かつ全体的に把握しようと試みられている（第4節にて検討）。ちなみに、この2つの主眼の不可分性についての指摘は、2000年代後半に出版された各書の中にも垣間見ることができる。例えば、現代の「子どもの貧困」研究のフロントランナーである松本（2008）が「子どもの貧困」というタームに一定の枠組みを与える際に、「子どもの貧困はそれのみで存在しているのではなく、この社会に存在する貧困の一側面である。社会に生み出され、家族の単位として立ち現れる貧困を、そこに生きる子どもを主体として把握し、子どもの育ちと人生に即してより具体的に理解するために、子どもの貧困という言葉が使用される」（松本2008, p.16）と主張していることなどが挙げられる。

## 2. 貧困層の子どもは家族の「被害者」か

では、家族の問題としての「子どもの貧困」問題とは何か。このような問題設定（すなわち「子どもの貧困」は、家族の貧困問題であるという問題設定）に立脚するとき、主題となるのが「貧困の連鎖」あるいは「貧困の世代的再生産」と呼ばれる現象である。この現象を主題に置いた研究に青木（2003）や阿部（2008, 2014）、湯澤（2009）や道中（2016）がある。例えば、「貧困の世代的再生産」というタームをいち早く使った青木（2003）は、この言葉に含みこませた意味を「貧困の世代的再生産あるいは継承とは、現象的には二世代にわたって、社会的に受容できないほどの貧困な生活状態が続くような状況が、ある集団あるいは層として形成されている事実を重視した概念である」（青木2003, p.11）と説明する。そして、自身の行った生活保護受給世帯を対象にした事例調査から「貧困の世代的再生産とは、『もろい家族』同士の『同類婚』を通じて（あるいは欧米では未婚のままの関係で）、また貧困な状態で暮らさざるを得ない『もろい家族』が再び生まれてくるという現象であり、その背景には、資本主義社会における『個人責任』というより『家族責任』を重視したシステム、その作用の結果である」（青木2003, p.79）と結論付けている。また、「貧困の連鎖」というタームを使用する阿部（2014）は、この言葉の含み持つ意味を「子どもの貧困は、学力や学歴といった認知能力のみならず、さまざまな不利を子どもに与える。そして、それらの不利を背負った子どもは大人になっても貧困から抜け出すことが難しくなり、次の世代の子どもたちに不利が引き継がれる。」（阿部2014,

p.38)と説明する。その上で、「貧困の連鎖」の「経路=パス(path)」の分類を試みている(阿部2014)。そこでは、大きく7つの「経路=パス(path)」が存在していることを指摘している。具体的には、「家族」という単位を通して継承される不利や困難の「経路」として、(1)金銭的経路(教育投資、資産など)や(2)家庭環境を介した経路(親のストレスや親の病気、親の育児スキルやスタイルなど)、(3)遺伝を介した経路(認知能力や身体的特徴など)、(4)職業を介した経路(職業の伝承)、(5)健康を介した経路、(6)意識を介した経路(意欲や自尊心、自己肯定感など)、(7)その他の経路(ロールモデルの欠如など)である。その上で、一般的に「貧困の連鎖」で指摘される「子ども期の貧困→低学歴→非正規労働→現在の低所得→現在(成人後)の生活困窮」(阿部2014, p.69)という「学歴-労働パス(経路)」(同上)以外にもそれぞれの要因が独立して存在する経路が存在していることを指摘した。湯澤(2009)は3世代にわたって貧困の世代的再生産が把握される母と子-インタビュー同時、母が37歳、子どもが19歳である一へのライフヒストリー調査から「貧困の世代的再生産」という現実が子どもの教育達成と成人後の暮らしに及ぼす持続的な影響力を描き出している。そこで見られた家族においては「親族ぐるみの家族形態の流動化」(湯澤2009, p.52)という特徴があることが指摘できて、家族内において「家族相互の資源化」(湯澤2009, p.52)ともよべる態様へと家族資源がなっていることの可能性を示唆した。道中(2016)は、生活保護を受給している母子世帯に着目し、その世帯の子どもが生育後も生活保護を受給しているという意味における「貧困の世代間継承」にあたる世帯の個票データの分析から被保護世帯の貧困の実相を明らかにした。そこでは、母親の学歴や10代での出産、ひとり親世帯であることなどが「貧困の世代間継承」に影響を与えていることが示唆されている。道中(2016)の調査には、データ上の限界がありながらも生活保護受給世帯の実相を描くだけでなく、そこでの世代間の影響まで視野に入れて一すなわち、調査そのものの時間軸の拡張を行って一調査を試みたところにその特徴がある。このように「貧困の世代的再生産」や「貧困の連鎖」という現象の主題化には、①「貧困」という社会状況によってもたらされる不利や困難がある特定の層にいる人々にのみ受け継がれ、蓄積されていることへと目を向けさせることを通して、②その継承や蓄積の先に「子ども」という存在がいることを意識させることで、貧困問題の議論に「家族」とい

う視点の導入を図る意図があったことが垣間見える<sup>3</sup>。

この立場の研究に多くの示唆を与えているのは、社会階層論や格差論によって蓄積されてきた知見であることは言うまでもなく、「子どもの貧困」研究における「貧困の連鎖」や「貧困の世代的再生産」を主題に据えた研究においても社会階層論や格差論によって見出された知見が引用されることが多い。引用元の具体的な例としては、荻谷（2001）の「意欲格差」や山田（2007）の「希望格差」、志水（2014）の「つながり格差」、本田（2005）の「ハイパーメリトクラシー」論などが挙げられる。その中でも Lareau（2011）<sup>4</sup>の研究は「子どもの貧困」を「家族」の問題として捉える際の多くの有効な理論的エッセンスを提供している。ブルデューの文化的再生産論を批判的に受け継ぎながら中流階級、労働者階級、貧困層という3つの階級に分類された「家族」の中に調査者自らが入り込んで参与観察をし、彼らの「自然な暮らしぶり」（“naturalistic fashion”）を描き出すことを通じて、階級による子育て方法の違いを明らかにした。そこでは、中流階級が「計画された子育て」（Concerted cultivation）を、労働者階級と貧困層が「自然な成長の遂行」（Accomplishment of Natural Growth）をしているとして、子育て方法が階級によって大きく2つに分類できることを指摘した（Lareau 2011, p.31）。この Lareau（2011）の分析枠組みは日本における「子どもの貧困」研究でもしばしば引用されてきた（小西 2006, 小西 2008, 西田 2012 など）。小西（2006）は Lareau（2011）の行った研究を「量的なパネル調査で得られた家族の不平等な性格を考慮したうえで『社会の中の家族』、そして『家族のなかの子ども』という視点を重視しつつ、『ブラックボックス』であった家族の内部に深く入っていき、子どもの発達の不平等、そして教育の不平等を明らかに

---

3 この点については、2000年代前半に社会問題化した貧困問題である若年ホームレスやワーキングプアといったタームと比較すると鮮明になる。これらのタームはあくまで「貧困者『個人』」に焦点が当てられており、この状態に至るまでの議論が机上にあがることは比較的少なかった。

4 本書の初版は2003年に出版されており、小西（2006, 2008）などはそちらを引用している。ただ、本稿では第二版を参照している。しかし、本稿の議論に初版と第二版における違いは影響しないと判断したため本稿では筆者は第二版より引用することにした。また、本書はそのタイトル“*Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life*”からもわかる通りあくまで階級間の「不平等」にこそ焦点を当てた研究であることには留意が必要である。

した」(小西 2006, p.105)として評価している。以上のような社会階層論や格差論で明らかにされてきた知見を援用しつつ、貧困層にもみられる現象をまとめたのが上記で紹介した阿部(2014)の7つの「貧困の連鎖」の「経路=パス(path)」である。

以上、「貧困の世代的再生産」および「貧困の連鎖」に焦点を合わせた研究において、「子ども」は「家族」の構成メンバーとして位置づけられ、親の貧困が子どもの発達や成長にどのような影響を与えているかという視点から研究がなされてきたことが確認できる。それだけでなく、「貧困の連鎖」の「経路」へとその問題を焦点化することを通して、貧困という社会状況のもつ複雑な側面を分解していく中で貧困という社会状況の解像度を上げる役割を担っている。それに関連してかどうかは一考する必要があるが、このような「子どもの貧困」の問題の主題化は、日本における「子どもの貧困」対策の策定に大きな影響力を持っていたことも指摘しておく必要がある<sup>5</sup>。しかし、このような研究においては「非貧困層」と「貧困層」という「集団間の差異」が浮き彫りになるのに対し、貧困の中で暮らす「子ども」の「生活」が葬り去られ、「貧困」という社会状況のもつ累積性、固有性、実存性が見えにくくなっていることが指摘されてきた(林 2016, 大澤 2017, 倉石 2017 など)。そこで、「家族」の一員として「子ども」を位置づける研究への批判的アプローチとして行われてきた研究が、次節でレビューする「子ども中心アプローチ」による「子どもの貧困」研究である。それは、「子ども」を「主体」として、「当事者」として捉えようとするものである。

### 3. 貧困層の子どもは主体性を持った「サバイバー」か

前節でみた「子どもの貧困」問題へのアプローチとは異なる形で「子どもの貧困」問題にアプローチしたのが Ridge(2002=2010)である。Ridge(2002=2010)は、当時のイギリスにおける貧困研究や貧困対策/支援

---

5 2013年(平成25年)に成立した「子どもの貧困対策の推進に関する法律」に基づき、2014年(平成26年)に「子供の貧困対策に関する大綱」(内閣府)では、子どもの貧困対策の意義について以下のように明記されていることにそのことが垣間見える。「子供の将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図る子供の貧困対策は極めて重要である。」(内閣府 2014, p.2, 下線部筆者)。

に関する政策での「子ども」の取り扱い方について「独自の利害と声と主体性をもった子どもとして立ち現れてくること」(Ridge2002=2010,p.16)がまれであったこと、すなわち、多くの領域で子どもたちが「最初から構造的にも、制度的にも排除されている」(同上,p.24)ことを指摘する。その上で、このことへ反省を含む問題提起から自身の研究手法を「子ども中心に据えたアプローチ」(同上, p.13)として名づけることで、「貧困」という社会状況の中で暮らす「主体」としての「子ども」に焦点を当て直した。ここでは、「子ども」を単なる「対象」として扱うのではなく、彼らの「生活についても、そこでの問題の重要性についても、それを一番よく知るのは子どもたち自身であるという認識」(同上,p.25)を基盤とした「主体」として取り扱うことを提唱した。そこで Ridge (2002=2010) は、低所得家庭出身の「子ども」たちへの詳細なインタビューを通して、低所得家庭出身の「子ども」たちの生活と経験を明らかにした。その結果、彼らは学校からの排除—それは同時に社会からの排除を意味するわけだが、—を経験すると同時に、学校内部においてもまた排除を経験していたという事実を明らかにした(Ridge2002=2010)。その結論を得たうえで、Ridge (2002=2010) は「低所得家庭出身の子どもと若者の生活が非常に多様で、その経験が年齢、ジェンダー、エスニシティといった多くの要因によって媒介されていることは明らかである」(同上,p.268)り、『『貧しい』子どもたちという均質的な集団は存在しない』(同上)ことを主張する。この Ridge (2002=2010) の研究について、例えば、小西 (2006) は家族に対してのアプローチが弱いこと、具体的には家族関係や個々の家族の背景(親の学歴や職歴など)や親の子育て方法について触れていないため、家族と子どもの関係や家族の社会的位置づけがきわめて一面的なものになっていることを指摘し、「貧困が子どもにもたらす社会的不利の一側面を把握するにとどまっている」(小西 2006, p.102)と指摘する。しかし、この指摘については、大澤 (2017) によって再批判が試みられている。大澤(2017)によれば、そもそも「子ども中心アプローチ」は、「貧困の世代的再生産」や「貧困の連鎖」のプロセスの解明をその目的とはしていない点で、小西 (2006) の指摘するような観点からこの手のアプローチは評価できないという。それよりも Ridge (2002=2010) が採用したアプローチの意義は「政策やウェルビーイングの実質的な在り方を検証する研究の方向性」(大澤 2017, p.19)にこそ求められるという。その上で、このようなアプローチの真価を「現在進む子どもの貧困対策への反証や提言として

大きな意義を持っている」(同上)と評価する<sup>6</sup>。このような観点から日本の「子どもの貧困」研究に目を転じてみると、これまで Ridge と問題関心を同じくする研究は、日本においてはほとんど行われてこなかったといっても過言ではない。その背景については倉石(2017)が興味深い指摘を行っている。倉石(2017)は教育社会学が「貧困」を苦手分野としてきた理由として、貧困概念それ自体に含まれる『『あつてはならない状態』、すなわち国家の責任においてただちに介入し、社会政策をもって解消すべき状態』(倉石2017, p.191)という価値判断へのコミットメントを迫られること、さらには、「貧困」という社会状況には、個人や個別世帯を単位とするといった技術的理由に収まりきらない実存的側面があることをその理由として挙げている。そこで、教育社会学では「集団間の差異」としての「階層」に焦点をあてることによって「貧困問題」が含み持つ倫理的・規範的側面や実存的側面へのコミットメントを巧妙に避けてきたのである(倉石2017, p.192)<sup>7</sup>。このような学問をする上での困難がまた、日本における「子どもの貧困」研究において、「貧困の世代的再生産」や「貧困の連鎖」の主題化に寄与している可能性があることは指摘しておくに値する。それでも、例えば、小西(2003)や志田(2015)は貧困層の子ども・若者を「主体」、あるいは「当事者」と

---

6 ちなみに、日本の「子どもの貧困」問題の社会運動においても、当事者としての「子ども」の声がその政策の策定プロセスにおいても大きな影響力を持っていた。例えば、注5で紹介した「子どもの貧困対策の推進に関する法律」および「子供の貧困対策に関する大綱」の制定および策定に向けた「子どもの貧困対策に関する検討会」(2014年4月17日～6月5日まで計4回の開催)の構成員に日本学生支援機構奨学生でありあしなが育英会奨学生の高橋が所属していたことなどがその証左である。しかし、ここでの大澤(2017)の指摘に則るなら、日本においては、「子どもの貧困」対策の効果の検証のために「子ども中心アプローチ」に基づいた研究が求められているともいえよう。

7 ここでの倉石(2017)の指摘は、「教育」の現場についても当てはまる。例えば、盛満(2011)は学校での参与観察やそこでの教師へのインタビューから日本の学校現場では貧困層の子どもが不可視化されている現状とそれを裏支えする学校文化の論理を明らかにしている。そこでは、生徒を家庭背景や成育歴によって「特別扱いしない」学校文化とそれにもとづいた教師の「良心的配慮」によって学校の貧困問題を見えにくくさせていることが明らかになった。また、この調査について盛満(2008)は、自身の調査においてもっとも困難だったのが対象校に調査の趣旨を理解してもらうことであったと述べている。

して捉え、彼らの生活世界を描き出そうとしている研究として挙げられる<sup>8</sup>。例えば、小西（2003）は北海道内に住む生活保護受給世帯および低所得世帯の子ども6名に対し聞き取り調査を行い、「家族の『脆弱さ』がいかなる形でその子ども自身の問題となって出現しているのか」（小西2003, p.87）を2001年に北海道で行われた量的調査を参照しながら明らかにする試みを行っている。そこでの問題設定は、「貧困の世代的再生産」（青木2003）ではあるものの、小西（2003）においては、それが「子ども」の生活の実情にどのように影響を及ぼし、彼らの自身がその現状をどのように受け止めているのかを明らかにしたという意味において、家族の問題としての「子どもの貧困」問題を貧困の中にある「子ども」を貧困問題の「主体」、あるいは「当事者」として捉えようとしている先駆的研究として位置づけることができる。小西（2003）は、聞き取り調査から「子ども」にとって生活保護制度が一種のスティグマとして機能を果たしていることを指摘した。志田（2015）は、これまでの「ひとり親家庭」研究において、その不利が経済的な側面にばかり焦点を当たっていたことを指摘し、「ひとり親家庭」の子ども5名への聞き取り調査から彼らが「主体」として、どのように「ひとり親家庭」という構造の中を生き抜こうとしているかを描き出した。そこでは、子どもは自身の家族の経験にアンビバレントな感情をもちながらもその経験を肯定的に理解しようとしていることや同居人以外の豊富なつながりの資源をもちながら生き抜こうしていることを明らかにした。そこから、経済的な再分配だけでなく、承認の観点からの「ひとり親家庭」への支援政策の必要性を提示した。

しかし、以上のような「子どもの貧困」研究における「子ども中心アプローチ」にも欠点がないわけではない。例えば、この手の研究では、「子ども期あるいは子どもの『いま』に着目」（大澤2017, p.22）しており、長期的な観点が抜け落ちていたことが指摘される。つまり、これらの研究においては貧困の中で生活する「子ども」の「短期的な観点（子ども期それ自体）

---

8 ちなみに、2000年代以前の生活困難層の「子ども」へのインタビュー調査を行い、当事者としての「子ども」に焦点を当てた論考として挙げておかなければならないものの1つに長谷川（1993）が挙げられる。ちなみに長谷川（1993）が収められている久富編（1993）は高度経済成長期にある日本社会における「貧困層」に焦点を当てた調査研究として今日の「子どもの貧困」研究に多くの示唆を与える文献の1つである。

と長期的な観点(大人になってからの結果)の両方から理解する必要がある」(Ridge2002=2010, p.16)とされているものの、この2つの観点を接続する枠組みでの分析は明確にはなされてこなかったということである(大澤2017)。それだけでなく、「子ども中心アプローチ」に基づく研究では、「『子ども中心の視点』に家族を位置づけることで、逆に当初の目的であった家族の中に隠された子どもの世界を理解しようとする試みが、再び家族の問題のなかに埋もれてしまっている」(大澤2017, p.19)ことも指摘される<sup>9</sup>。

ここで紹介した「子どもの貧困」研究において、「子ども中心アプローチ」を意識した研究は、日本においても「子どもの貧困」問題の前景化によって以前より行いやすくなった経緯から、多くの研究者によってこの手のアプローチを採用した研究が行われるようになってきた。しかし、それは単なる「子ども中心アプローチ」とは異なり、「貧困の連鎖」や「貧困の世代的再生産」に関する研究によって蓄積されてきた知見を背景に置きながら、「子ども中心のアプローチ」を手段にして、「子どもの貧困の経験」(大澤2017)を主題として「子どもの貧困」の複雑性や実存性に迫ろうとするものである。次節にて、そもそも「子どもの貧困の経験」という主題が持つ意味と、その視点を意識していると思われる主要な「子どもの貧困」の研究を紹介する。

#### 4. 「子どもの貧困の経験」という視点の導入:〈経験〉と〈移行〉というキー概念

前節の最後に指摘した問題意識から大澤(2017)は「子どもの貧困の経験」を「子どもの貧困」研究において主題化することの重要性を主張している。そこでは、「貧困にある生活の中で当事者がどのように主体性を発揮してそれに対処しているか、それを受け止めているか」(大澤2017, p.21)という貧困の中にある「子ども/若者」の「いま-ここ」での生活経験を焦点化するだけでなく、同時に当該の「子ども/若者」のさまざまな人生の諸画期におけるライフチャンスをも視野に入れる必要があるという(大澤2017)。すなわち、貧困の中にある「子ども/若者」がその「経験のなかで、いかに適

9 大澤(2017)によるこの点の指摘は、Ridgeのその後の研究の動向を概観した上でのものである。大澤(2017)がその代わりとして主張する視点が「個人の環境としての家族」(大澤2017, p.16)である。

応の前提となる生活の評価や自己の評価を形成し現状を受け入れていくのか、そのことが選択肢や制約にどのようにつながっていくのか、といったことをまずは明らかにすることが必要」(大澤 2017,p.23) になるということだ。さらに、この視点は「物的基盤に基づく子どもの生活に対する認識をとらえる視点であり、それが象徴的・関係的な側面に与える影響を理解するだけでなく、子ども自身のアイデンティティを通じた行為や選択に与える影響を理解する視点ともなる」(同上, p.23) ともいう。このようにして、「子どもの貧困の経験」に焦点を当てた研究は「貧困」の中にある「子ども／若者」の「『いま』を理解し、それを『これから』の連続線上の問題として考え」(同上) することで、当該の「子ども／若者」の「声を聴く研究(ここでは、「子ども中心アプローチ」による「子どもの貧困」研究のことを指している。)の時間軸を拡張する方向」(同上, カッコ内筆者) へと舵を切ることになるというのだ。では、このような「貧困の経験」と「子どもの視点」を掛け合わせた「子どもの貧困の経験」という視点を導入した調査／研究はどのようにして可能なのだろうか。この点について、具体的な調査のやり方として多くの示唆を与えてくれる研究が3つあげられる<sup>10</sup>。1つ目が「貧困・生活不安定層」の「子ども」の子どもから大人への移行過程を長期的な調査から描き出した西田(2012)、2つ目が生活保護受給世帯で養育されている中学生年代の「子ども」のライフストーリー調査を行った林(2016)、3つ目がいわゆる「ヤンキー」と称される高校生年代の若者<sup>11</sup>の生活世界にエスノグラフィックなアプローチで接近した知念(2018)である。これら3つの論考において、

10 ここで紹介する文献は、一部、社会福祉学領域にもまたぐ論考が収録されているものの、教育社会学を中心にした教育学領域の文献である。管見の限り、社会福祉学領域にこのような視点を共有した研究は見当たらない。しかし、大澤(2017)が「子どもの貧困の経験」という視点に基づく調査／研究はソーシャルワークの実践にも多くの知見を与えることを主張していることを鑑みれば、社会福祉学領域においては、実践者と協働しながらの調査／研究の在り方も視野に入れていく必要があるように思われる。

11 知念(2018)の中では、当該の高校生らが使用していた語彙を用いて〈ヤンチャな子〉とカテゴライズされている。また、同文献において、ヤンキーという存在を「特定の社会問題(例えば若年非正規雇用者の増大、子ども・若者の貧困)が生じる原因が個人にあるのか社会にあるのかという議論を喚起する」(知念 2018, p.15) 存在として同定している。このような点からも、知念(2018)は「子どもの貧困」研究の一端として位置づけることが可能である。

興味深いことに、〈移行〉というキー概念が登場する。この概念の導入の意図について、すくなくともこの3つの論考に共通するのは、貧困層にある「子ども」がその後の人生でたどるプロセスがあまりに多様で、複雑であることへの問題意識がある。例えば、林（2016）はそれまでの教育社会学の分野において用いられてきた「進路選択」や「進路形成」という概念の代替枠組みとして〈移行〉という概念を導入している。林（2016）によれば、前者の概念においては、その前提に自由な選択をする主体的な存在としての個人（林2016, p.14）が置かれており、当該の「子ども」の置かれている社会状況を見えづらくしていることを指摘する。そこで、当事者の主体の選択といった意志を含まずに、「子ども」がたどった進路やその人生の中で遭遇した経験を客観的に捉えるための概念として〈移行〉という概念を導入する。西田（2012）や知念（2018）については、当該の若者の人生のプロセスを単なる「学校から仕事への移行」と同義のものとして取り扱わないために、すなわち、そのプロセス以外の人生の過程も視野に入れるために、〈移行〉過程という概念を導入している<sup>12</sup>。これら3つの論考を参照することで、大澤（2017）が提案した「子どもの貧困の経験」という視点から「貧困」の中にある「子ども」のリアリティを描き出すための具体的な調査の方向性が見えてくるように思われる。それは、「当事者」としての「子ども」の視点から「貧困の経験」を連続的かつ網羅的、あるいは全体的に把握するために〈移行〉過程への着目が重要であるということである。では、これらの調査／研究において、貧困層の「子ども」は向き合われているのだろうか。

西田（2012）は「貧困・不安定層」の若者への継続的なインタビュー調査から当該の「子ども」の子どもから大人への〈移行〉過程が一般的にその生活が「遊びの罫」や「ジェンダーの罫」にはまっていると読み解かれるのに対して、「彼／彼女たちにとって見知った、なじんだ、身近にある大人の世界に、大きな不安や葛藤を抱くことなく参入していくプロセスであり、『困難で不安定な大人の生活への自然な移り行き』と」（西田2012, p.104）名づけることで「当事者」の視点から読み解き直すことを主張している。その上で、これまでの教育社会学研究において、「貧困・生活不安定層」の「子

---

12 知念（2018）に至っては、一枚岩的に理解されてきた〈ヤンチャな子〉らの内部の「社会的亀裂」に焦点を当てている意味において、当該の「子ども」たちのそれぞれの〈経験〉の固有性に迫っているともいえる。

ども」の存在が問題視されず、放置されてきたことの背景として、彼らが「自らが抱える問題を主張し、研究者がこれに呼応して研究を進め、教育政策にも影響を及ぼ」（同上、p.135）することがなかったからだと指摘する。林（2016）においては、「貧困の世代的再生産」という課題設定のもとで生活保護受給世帯で暮らす「子ども」に焦点を当てている。そこでは、生活保護受給世帯で暮らす「子ども」の多様な進路分化は中卒移行からすでに始っており、その後の〈移行〉の過程には断続性という特徴があることを明らかにした。その上で、当該の「子ども」へのインタビュー調査から、彼らが自身の家族の家庭生活の「担い手」としての姿や自身の進路を「選択」していく姿に当該中学生の「主体」を求め、「当事者」としての「子ども」の生活世界を描き出している。知念（2018）は、それまで一枚岩的に理解されていたヤンキーの中にも、地域との関係や友人との関係といった彼らもっている社会資源のヴァリエーションによって、「社会的亀裂」が生じており安定的な〈移行〉過程を歩む層と不安定な〈移行〉過程を歩む層の2つの層にそれらは分けられることを明らかにした。

実は、これらの「子どもの貧困の経験」という視点を共有する「子どもの貧困」研究を眺めてみると、興味深いことに、研究者／調査者と「子ども」の相互行為を露骨に記述することの重要性が浮かび上がってくる。その相互行為を論考において露骨に開示しているのが、最後に紹介した知念（2018）である。具体的には、当該の「子ども」の「家族」に関する論考において、その記述が散見される。知念（2018）は、「記述の実践としての家族」という視点から当該の高校生たちのアイデンティティの欲求の次元—それは自分の存在意義を確認するための場としての家族の次元である—における「貧困家族であること」のリアリティを明らかにしている。その考察部分において、「第二に、会話のなかで私が彼らの家族を『逸脱的な家族』として記述しようとする、『記述のポリティクス』が姿を現し、彼らは私の記述を否定（＝上書き）した」（知念 2018, p.164, 下線部筆者）とまとめている。知念（2018）の総合考察においても、「その結果、明らかになった最大の知見は、調査当初、私自身が一様の集団と捉えていた〈ヤンチャな子ら〉は、一見まとまりをもった一つの集団のようにみえるものの、そこには『社会的亀裂』が生じていて、二つの経路を生きる若者が内包していたということである」（同上、p.212, 下線部筆者）とまとめている。ここに垣間見えるのは調査者としての知念（2018）が継続する社会調査の中で、思いもよらぬ形で当該の「子ども」

からの抵抗に出遭っているということである。そこでは、当該の「子ども」による研究者／調査者への抵抗の場面を自身の知見の資源としている。その他、2つの調査／研究においても、そのような場面があったであろうことは、論考の全体を読めばすぐに想像される。ここに、これまで「子どもの貧困」研究で見過ごされてきたもう1つの「子ども」との向き合い方を垣間見ることができる。それは、社会調査という制度における「主体」としての「子ども」である。この意味おいての「主体」としての「子ども」に出遭うことができるのは、まさに継続的なフィールドワークによって可能になるのだと思われる。ここに、「子どもの貧困の経験」という視点を共有しているであろう研究群がわざわざ〈移行〉という概念を新たに導入するに至ったのかという点が明らかにされる。そこには、これまでの調査／研究がそのカテゴリー化実践のために不可視化してきた「子どもの貧困」の側面を指摘するためだったのだ。そして、このことは、今日の社会が個人化が進む後期近代だからといったような時代背景が研究者／調査者に要請したものではなく、いわずもがな当該の「子ども」が置かれている「貧困」という社会状況がこそ、研究者／調査者に要請したものであるといったほうが妥当である。しかし、ここで1つ留意しておかなければならないことがある。以上の結論は「子どもの貧困」研究においてフィールドワークをはじめとしたいわゆる質的調査の優位性を主張しているのではないということである。各論が自身のフィールドで出遭った「子どもの貧困の経験」を描くにあたり、それまでの「子どもの貧困」研究で明らかにされてきた貧困・生活不安定層が抱える不利や困難、それによる彼らの一般的な〈移行〉過程を研究者／調査者が関わってきた「子ども」のそれを分析する際の参照点としていることを鑑みれば、貧困・生活不安定層が置かれている社会状況を非・貧困・生活不安定層との比較において、マクロに調べていくことも重要である。このことは、社会調査という制度における「主体」としての「子ども」と出遭うためには—それは、「子どもの貧困の経験」のもつ固有性や複層性に出遭うことである。一、それに先行して社会集団の生活様式の一般的な傾向という意味での「カテゴリー化実践」が研究者／調査者には要請されることを示唆している。

以上の議論をまとめると、「子どもの貧困の経験」という主題を念頭において「子どもの貧困」の研究をしようとすると、当該の「子ども」の多様な人生のプロセスを可視化するために、〈移行〉という概念を導入せざるを得なくなる。そして、このことは、必然的に研究者／調査者に当該の「子ども」

と継続的なかわりを要請する。そうしたかわりの中で、研究者／調査者が出遭うのは、社会調査という1つの制度という位相で現れる「主体」としての「子ども」であるということである。そして、その出遭いは当該の「子ども」を、単なる「対象者」—それは「被害者」としての様相を含み持つ—や自身の「主体性」を発揮して生き抜こうとする「当事者」としてのみ描くことを困難にしているということである。しかし、その困難さが最終的に「貧困」という社会状況が個々人に降り注ぐ際の固有性や複層性を描くことを可能にしているのかもしれない。

## 6. おわりに

本稿の目的は、「子どもの貧困」研究において研究者や調査者がいかにして「子ども」—それは、時に若者という存在としても現れる存在としての「子ども」—と向き合うことが可能なのかについて思索することであった。そのために、2000年代後半の日本における「子どもの貧困」研究の主要文献のレビューを通して、そこでは、研究者／調査者が「子ども」という存在とどのように向き合ってきたかを概観した。具体的には、1つに「家族の中の『子ども』」として貧困という社会状況の「被害者」的側面を強調するように扱う研究があり、もう1つには「主体」を持った「当事者」として「貧困」の中を生き抜く存在としての「子ども」の側面を強調するように扱う研究があった。しかし、近年の「子どもの貧困」という社会問題の前景化によって、「子どもの貧困の経験」という主題を念頭に置いた研究が台頭しつつあることも確認した。それらの研究を見てみると、それまでの「子ども」の存在に加え、社会調査という制度という位相における「主体」としての「子ども」—研究者／調査者のカテゴリー化実践に抵抗する存在という意味においての「主体」—にも着目されるようになりつつあることが確認された。そして、その意味での「子ども」という存在と向き合うことで、「子どもの貧困の経験」に含まれる「貧困」の実存的側面へのコミットメントの可能性をもたらしていることが示唆された。

最後に少しだけ筆者自身の経験について述べて本稿を締めくくることにする。実は、筆者はこれまで「子どもの貧困」の支援の現場で6年ほど支援者として当該の「子ども」と向き合ってきた。その一方で、研究者として、調査者として生活史法という社会調査の制度の中でも当該の「子ども」と向き

合ってきた。拙い調査経験ではあるものの、学部生時代はボランティア活動をそのまま卒業論文にした一方で、修士論文は生活史法を手にして支援者としてポジショナリティから降りるように社会調査を行った。とりわけ、後者においては、人文社会科学を足場とする研究者／調査者（その中でもとりわけ政策学的な志向を有しない筆者）はどのようにして「社会」へコミットメントしていくかについては現場からの視線にある種の「居心地の悪さ」を感じながらなかなか自身の社会調査の意義を見出せずにいたわけである。前者の支援者というポジショナリティを活用した社会調査は、その意味において幾分かその「居心地の悪さ」を払拭するには良くも悪くも活用しがいのあるものだった。では、この「居心地の悪さ」の正体を考えてみると、本論文から得られた知見に依拠するなら調査者／研究者が当該の「子ども」に行っていた「カテゴリー化実践」への「子ども」による抵抗にこそあったのではないだろうか。すなわち、インフォーマントによる視線であり、それは巡り巡って自身の調査実践に対する「居心地の悪さ」だったのかもしれない。だとするならば、意外にも、その「居心地の悪さ」は、「社会」の様相を明らかにするための重要な資源ともいえるのかもしれない。

### 参考文献・引用

- Lareau, Annette, ([2003] 2011) *Unequal childhoods : class, race, and family life*, 2nd ed., University of California Press.
- Ridge, Tess (2002) *Childhood poverty and social exclusion : from a child's perspective*, Policy Press. (= 渡辺雅男監訳, 中村好孝, 松田洋介訳 (2010) 『子どもの貧困と社会的排除』, 桜井書店.)
- 浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編 (2008) 『子どもの貧困：子ども時代のしあわせ平等のために』, 明石書店.
- 阿部彩 (2008) 『子どもの貧困：日本の不公平を考える』 (岩波新書 新赤版 1157), 岩波書店.
- 阿部彩 (2014) 『子どもの貧困Ⅱ：解決策を考える』 (岩波新書 新赤版 1467), 岩波書店.
- 生田武志 (2009) 『貧困を考えよう』 (岩波ジュニア新書 638), 岩波書店.
- 岩田正美 (2007) 『現代の貧困：ワーキングプア／ホームレス／生活保護』 (ち

- くま新書 659), 筑摩書房.
- 青木紀 (2003) 「序章 貧困の世代的再生産の視点」青木紀編『現代日本の「見えない」貧困：生活保護受給母子世帯の現実』(明石ライブラリー 52), 明石書店, pp.11-83.
- 青砥恭 (2009) 『ドキュメント高校中退：いま、貧困がうまれる場所』(ちくま新書 809), 筑摩書房.
- 大澤真平 (2017) 「子どもの貧困の経験という視点」北海道大学大学院教育学研究院・教育福祉論研究グループ『教育福祉研究』(22), pp.15-27.
- 久富善之編 (1993) 『豊かさの底辺に生きる学校システムと弱者の再生産』, 青木書店.
- 倉石一郎 (2017) 『『貧困』『ケア』という主題の学問への内部化：教育社会学における排除／包摂論の生成と残された課題』教育社会学会(本田由紀・中村高康)編『教育社会学のフロンティア I 学問としての展開と課題』, 岩波書店, pp.189-209.
- 荻谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機：不平等再生産から意欲格差社会へ』, 有信堂高文社.
- 小西祐馬 (2003) 「第 2 章 貧困と子ども」青木紀編『現代日本の「見えない」貧困：生活保護受給母子世帯の現実』(明石ライブラリー 52), 明石書店, pp.85-109.
- 小西祐馬 (2006) 「日本社会福祉学会子どもの貧困研究の動向と課題」日本社会福祉学会『社会福祉学』46 (3), pp.98-108.
- 小西祐馬 (2008) 「先進国における子どもの貧困研究：国際比較研究と貧困の世代的再生産をとらえる試み」浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編『子どもの貧困：子ども時代のしあわせ平等のために』, 明石書店, pp.276-301.
- 志田未来 (2015) 「子どもが語るひとり親家庭：「承認」をめぐる語りに着目して」日本教育社会学会『教育社会学研究』96 (0), pp.303-323.
- 志水宏吉 (2014) 『「つながり格差」が学力格差を生む』, 垂紀書房.
- 知念渉 (2018) 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』, 青弓社.
- 西田芳正 (2012) 『排除する社会・排除に抗する学校』, 大阪大学出版会.
- 長谷川裕 (1993) 「3 章 生活困難層の青年の学校の「不適応」：彼らはそれをどう体験しているか」久富善之編『豊かさの底辺に生きる学校シス

- テムと弱者の再生産』, 青木書店, pp.107-145.
- 林明子 (2016) 『生活保護世帯の子どものライフストーリー：貧困の世代的再生産』, 勁草書房.
- 本田由紀 (2005) 『多元化する「能力」と日本社会:ハイパー・メリトクラシー化のなかで』, NTT 出版.
- 松本伊智朗 (2008) 「序章 子どもの貧困研究の視角」 浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編 『子どもの貧困:子ども時代のしあわせ平等のために』, 明石書店, pp.13-61.
- 道中隆 (2016) 『貧困の世代間継承:社会的不利益の連鎖を断つ 第2版』, 晃洋書房.
- 盛満弥生 (2008) 『『同和教育論』の教室から (18) 自身の「経験」と「こだわり」をバネにして』 部落解放・人権研究所 『ヒューマンライツ』 (245), pp.36-41.
- 盛満弥生 (2011) 「学校における貧困の表れとその不可視化:生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に」 教育社会学研究 『教育社会学研究』 88 (0), pp.273-294.
- 山田昌弘 (2007) 『希望格差社会:「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』 (ちくま文庫), 筑摩書房.
- 山野良一 (2008) 『子どもの最貧国・日本:学力・心身・社会におよぶ諸影響』 (光文社新書 367), 光文社.
- 湯澤直美 (2009) 「貧困の世代的再生産と子育て:ある母・子のライフヒストリーからの考察」 日本家族社会学会 『家族社会学研究』 21 (1), pp.45-56.